
第参次世界大戦 卷ノ壱
KAMIZAKURA

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第参次世界大戦 卷ノ壹

【作者名】

KAMIZAKURA

【あらすじ】

歴史もの・フィクション・ド初心者が執筆。

それでも良ければ読んでください。

プロローグ

第二次世界大戦が大日本帝国の敗戦で終わる約一週間前

大日本帝国海軍は沈没した大和型戦艦2隻に代わる新たな「超弩級
潜水母艦を建造した――――」。

就任

「神楽坂大佐」

「はい」

今日、神楽坂 零 帝国海軍大佐は海軍本部に呼ばれていた。

何やら急用らしい。

「何の御用でしょうか」

しかし、私を呼んだ理由は大概想像がつく。

「久しぶりだな。少佐に昇進して以来か？」

・・・。

「そんなことを伝えるために私を呼んだわけではないのでしょうか？」

「ああ、そうだそうだ、そうだった！にやはははははは！☆」

というと私をここに呼んだ張本人、坂東 要 少将は頭に手を当て
奇妙な笑い声を出した。

一部軍人の間ではこの珍しい女軍人を嫌う人もいる。

が、中には特別な目で一目置いている軍人もいた。

私には理解できんが（逆に殺意すら覚える）。

全くこの人はッ……！

零は心の底から呆れた。「急用だ」とわざわざ横須賀から呉に呼んだのはそちらだというのに。

まあ、腐ってもこの人は少将だ。そんな愚痴を吐くわけにもいかない。

しかし、急に坂東少将は神妙な面持ちに変わった。

「本題に入ろう。今日大佐に来てもらったのはほかでもない」

「はい」

「例の“超弩級潜水母艦”あれについてだが、建造が完了した。これより君を艦長に任命する」

「……は？今なんと？」

「だーかーらー。新しい潜水艦の艦長にするっつってんの」

今度は坂東少将が呆れた顔をして言った。

「い、いやまあ「例の計画」については参加すると申しましたけれども、

艦長就任は聞いておりませんし」

「しかし君は潜水艦戦の経験が豊富だ。過去に大量の駆逐艦を撃沈してる。

この記録は今までどの軍人にも破られていない。

無論、アメリカ海軍人にもだ。私は君の技術を信頼しているのだよ」

少将はいやらしい目でこちらを見つめてきた（若干寒気がする）。

「大丈夫だ。君は指示をするだけ。他のことは航海長と兵装長に任せばいい」

少将は指を振り振り、説明した。

「簡単に言ってくれますが潜水艦は複雑故に扱っても非常に難しい」

「んなことあ分かっとるよ。安心しな。航海長と兵装長は私が雇った」

そうだ、この人、人事だけはうまいんだよなあ。

「了解しました。少将が雇用されたのなら安心です。謹んでお受けします」

「ん」

坂東は適当な返事をした。

「早速ですが、彼らの経歴について知りたいのですが・・・」

「おう」

と言うと、少将はぺらっぺらの紙を2枚放り投げた。

「これだけ？」

普通だったら 15枚は超えるぞ。

「これだけ」

そうだった。この人、普通じゃなかったんだ。

出港

通常では甲高い喇叭の音と共に港を離れていくのだが、今回は機密保持のため、

喇叭の演奏は中止であった。

沢山の士官が私たちを見守っていく。

中には手を振っている者もいた。

我々は大日本帝国にとって、最後の頼みの綱だからな。

零の気持ちは一層高まった。

しかし、坂東が零を艦長に任命したのは他の目的があるということ
を、

大日本帝国政府はこれから知ることになる。

（

卷ノ吉終ワリ。卷ノ弐ニ続ク．．．）

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~24750

第参次世界大戦 卷ノ壱

2020年06月29日 02時36分発行